



からこかぎ

第16号 平成28年11月13日(日)発行

唐古・鍵遺跡の保存と活用を支援する会

〒636-0247 奈良県磯城郡田原本町阪手233-1 唐古・鍵考古学ミュージアム内

TEL 090-9257-3688 Email: karakokagijimukyoku@swan.ocn.ne.jp

平城京天平祭に参加して

今西 和代

1 みつきうまし祭りー平城京天平祭・秋ー

奈良県では、例年平城京天平祭が開催されています。今年も、10月29日(土)から11月6日(日)まで平城京跡で行われました。主催は、「平城京跡にぎわいづくり実行委員会」です。私たちの会の運営委員の宮崎さんがその会のメンバーというご縁で参加の打診があり、今回初めて「まが玉づくり」を出店しました。

2 運営委員会の決定

参加にあたり、10月の運営委員会で、2点について議論を重ねました。一つは、平城京天平祭の参加についてです。唐古・鍵遺跡の情報発信と唐古・鍵遺跡公園の開園のお知らせができる良い機会となり、積極的に取り組むことにしました。さらに、一つは、その収益については、「特別会計」を組むことにしました。後者について、ご説明します。

これには、経過があります。毎月第2・4水曜日の実施しているものづくり教室では、年に1~2回程度、ものづくりに関係する県内外の博物館や遺跡などを会員の乗用車に分乗して訪れていました。しかし、年々、遠距離の運転が困難となり、今年度、貸切バスの利用を検討したのですが、近年は価格が高騰していて、一人当たり5千円を超えることがわかり、今年度は計画を断念していました。そこで、今回のお話がありました。参加にあたり、二つの条件を課しました。一つは、本会計に

影響せず独立採算の会計処理を図ること。一つは、旅行は、会員全員の方々に参加を呼びかけ実施することです。

本決定は改めまして、来年度の総会にご報告し了解をいただく予定にしています。

会員の皆様のご理解をお願いいたします。



3 天平祭の参加

10月29・30日、11月3日・5日・6日の5日間で毎日50人近くの方が、まが玉づくりを楽しんでくれました。そこでは、唐古・鍵遺跡とミュージアムのパンフレットを配布し、会員お手製の唐古・鍵遺跡の写真や遺跡公園の写真などを貼り出しました。多くの方から遺跡や公園に関する質問をいただきました。収益金は、現在会計の服部さんが計算中ですが、想定を上回ることが予想されます。

お手伝いをいただいた会員は、連日「まが玉づくり」の受付や作り方の指導に追われ、延べ41名の方が汗をかいてくれました。

なお、天平祭の開催日の11月5日には、田原本町の文化祭で「弥生生活体験」として「火熾し」コーナーを開設し、同じく11月6日午後から奈良県美術館の研修室で、「まが玉づくり」教室を開催しました。秋は、連日の活動となり、充実したシーズンを過ごすことができました。

遺物紹介 (12) —大型建物 (第74次)

会報編集メンバー

1 遺構転写

今回は、ミュージアム入り口に遺構面が展示されている第74次調査(1999年)で検出された大型建物を紹介します。1980年以降、堆積面の土層や柱穴などの遺構面を樹脂に接着、剥離して博物館に展示例が増えています。一般的な手順は、遺構剥離面を削りだした後、合成樹脂を塗布します。その後、布による裏打ち補強をし、遺構面を剥ぎ取ります。最後に、剥離面を水洗した後、パネルに整形されます。

2 大型建物

大型建物は、西地区の縁辺に位置し、住宅建設に伴う調査で検出されました。調査区は、南側の73次調査で大溝4条が検出されていることから西地区の居住域南限にあたると思われ、それ以降は落ち込みの可能性があります。



大形建物は、主軸は北西—南東方向に傾き、総柱式(両側の柱列以外に建物中央の棟通りに柱列)の掘立柱建物(報告書)で、北妻側に建物上端の棟木に達する独立した棟持柱があります。短辺(梁行)7m、長辺(桁行)11.4mの80㎡で、南側妻部は未確認ですので伸びる可能性があります。柱穴は長軸2m、短軸1mの殆どが長楕円形で16柱穴のうち3本(直径60cm)の柱が残存し、棟持柱はヤマグワ、他はケヤキ材です。

時期は、掘方から畿内Ⅱ様式土器が出土し、柱穴がⅠ新段階～Ⅱ古段階の溝を切り込み、第Ⅲ様式古段階(中期中葉前半)の小溝に切り込ま

れているので中期前葉といえます。近畿の代表的大形建物は、「池上曾根遺跡」の独立棟持柱建物(135㎡)が有名ですが、年輪年代測定法ではBC52年(中期後半)ですので、唐古・鍵遺跡の大形建物は弥生期では最古級のものといえます。なお、柱のC14の年代測定では、1本は紀元前4～3世紀前半の年代、1本は下っても紀元前5世紀までとされています。後者は、伐採から数十年程度経た後に大形建物に利用されたものと推測されています。

3 大型建物の機能

発掘を担当された故豆谷和之先生は、大形建物を「祭祀機能を持った倉庫」であったとし、その建築にあたっては、居住する集落のみならず地区単位の労働力を必要としたとされ、共同体を繋ぐ紐帯であったと指摘されています。

大形建物の用途については、首長居館、神殿、倉庫等多くの候補があげられ論議されています。特に、池上曾根遺跡の大形建物について、「弥生都市論」と関連し独立棟持柱をもつ建物を「神殿」とする意見が強かったのですが、建物周辺の土壌から多量の稲のプラントオパールが検出され「倉庫」の可能性が高いとされています。

4 大形建物の系譜

最近では、縄文時代の独立棟持柱建物が多く検出され、それが縄文晩期まで継続しています。その分布域は新潟県や石川県を中心に広がっていて、御所市観音寺本馬遺跡(縄文晩期)でも検出されています。それは、「亀甲型建物」と呼ばれ、柱穴間を亀甲形に結び復元されています。その形態は、まさに独立棟持柱建物です。

宮本長二郎先生は、第74次調査建物を「(縄文期の)伝統的木造技術に新建築技術を加えつつ着実に発展する様相」を示していると評価されています。築造時期が、縄文時代の名残を残している中期前葉ということとを考慮すると、用途として縄文時代に多くみられる周辺住民の共同作業場も考慮する必要があると思います。

遺跡紹介 (11) —伊勢遺跡

弥生ウォーク世話人グループ

1 位置等

滋賀県守山市にある伊勢遺跡は、東西700m、南北450mの約30haにおよぶ弥生後期の大規模集落です。遺跡は、琵琶湖に流れる野洲川が形成した扇状地（標高94m）に位置しています。野洲川流域には、広域の水田址が検出された服部遺跡や大規模環濠集落として著名な下之郷遺跡がありますが、それらより一段高い位置にあります。遺跡の隆盛期は、卑弥呼擁立前の「倭国大乱」（BC140～180年）の時期に相当します。弥生後期ですので、近畿の大規模集落は衰退し集落は分散しますが、突如として出現する伊勢遺跡は特異な例といえます。

今回は、大型建物を中心とした集落の構造と周辺の遺跡の動向に着目してご説明します。

2 大型建物群

遺跡の東半部に大型建物(13棟)が計画的に配置されています。大形建物群の配置は、魏志倭人伝に記載されている「居所宮室楼観城柵嚴設」といった卑弥呼の住まいを髣髴させます。



- (1) 大型建物 楼観を中心として直径220mの円周上に配置された独立棟持柱建物が6棟検出されています。円周状の配置に加え、梁行1間×桁行5間と規格化され、計画性もあります。
- (2) 方形区画域 円周上の大型建物群の内部に、2重の柵で区画された大型建物3棟と小型倉庫がL字上に配置されています。

(3) 楼観 方形区画の大型建物から東に30mの距離に一辺9mの正方形の総柱建物があり、柱穴間には板塀跡が検出されています。吉野ヶ里遺跡は、類似の建物を楼観と評価しています。

(4) 超大型建物 円周上の大型建物の外側に1辺13.6mの床面積185㎡の大型建物があり、屋内に棟持柱（心柱）を配してあり、床面には赤色の焼床（良質な粘土を高温で焼成）に加え窓際にはレンガ状に焼かれた壁材があります。

(5) 5角形の建物群 遺跡の西半部には堅穴建物群があり、そのうちの9棟は柱穴が5個ほど検出されており、5角形の堅穴住居と推定されています。5角形の建物は、日本海側の遺跡で散見されるとのこと。

3 周辺の遺跡

遺跡から8km東に、大岩山があります。そこから、近畿式銅鐸(12個)と三遠式銅鐸(12個)が出土しています。西日本と東海地方に分布している銅鐸が一緒に出土することから、この地域は、東西の交流の結節点となっていたことがうかがえます。

また、遺跡の西方1.7kmに弥生後期の大型建物が4棟(独立棟持柱建物2棟)が検出された下鉤(しもまがり)遺跡(弥生後期)があり、柳葉形銅鏃、銅釧、銅鏡に加え銅鐸の土製鋳型も出土していることから青銅器の生産遺跡と評価されています。一方、北西2kmには、下長遺跡があり、弥生時代末の独立棟持柱建物が検出され、川跡から古墳期初頭の準構造船が出土しています。また、北陸・山陰・近畿・瀬戸内など各地の土器が出土しており、琵琶湖を利用した積極的な交流があったことが裏づけられます。このことから、これらの遺跡は琵琶湖に流入する網の目状の河川を利用して、伊勢遺跡は政治・祭祀を担う中心集落、下鉤遺跡は生産機能を、下長遺跡は商業機能を担う集落として構成され、2～3世紀の社会の有様を示しているといわれています。

第17回弥生ウォーク(座学) ノート —初期水田址—

宮川 真由美

1 はじめに

10月8日(土)に開催された第17回の弥生ウォーク(座学)は、ボランティア室で開催され、25名を越える参加者が集いました。前回の弥生ウォークが、近畿を代表する水田遺蹟として著名な池島・福万寺遺蹟でしたので、その関連で初期水田址とその評価について報告があり、以下まとめてみました。

2 池島・福万寺遺蹟

最初に、池島・福万寺遺蹟の水田経営のパターンの確認をし、今回は、池島・福万寺遺蹟の前期中葉の初期水田址=水路と小区画水田が直接に結合する灌漑方式=が奈良盆地の初期水田址と同様の形態であるかが焦点となりました。

3 奈良盆地

スライドを使って幾つかの奈良盆地の遺蹟が紹介されました。

(1) 奈良市平城京左京三条遺蹟 先日現地説明会が開催された「平城京左京三条遺蹟」(低丘陵地に位置する)の下層(標高60m)から検出された前期の小区画の水田遺構(5500㎡)の説明がありました。検出された水田は、水路と地形勾配(東北東→西南西)を意識した大畦畔と幹線小畦畔とそれに直交する支線小畦畔でした。地形を意識した配置は、池島・福万寺遺蹟も同様で、弥生期の大半の水田址に共通するものと思えました。驚いたのは、検出された畦(あぜ)の高さが水田面より3cm、耕作土からは1~3cmと浅いことでした。

(2) 大和高田市新村・柳原遺蹟 遺蹟は最近発見されたもので、後期を中心とした小区画水田址が検出されていました。標高が75mもある扇状地形に位置しており、後期に至っても小区画水田が持続していたことが分かります。それは、大区画の水田を作り出す技術力が、後期段

階に至っても備わっていなかったということになります。

(3) 橿原市萩之本遺蹟 ここでは、地形を中心に説明がありました。遺蹟からは、縄文後期から弥生前期に埋没する流路が断続的に検出されており、その後に安定した地盤となり、その傾斜を利用した水田経営であったとのこと。標高70m前後の扇状地形ということで、小丘陵ないし扇状地形の緩傾斜を利用した初期水田という選地が確認でき、緩傾斜の地形利用は、初期水田の共通の特徴との説明がありました。

(4) 御所市秋津遺蹟・中西遺蹟 前期の水田址が検出された代表格の遺蹟ですが、以前に弥生ウォークで訪問したので、その後の自然科学的知見を中心に説明がありました。最初に、カラーのスライドで、前期前半(2600~2400年前)、前期末および前期末~中期初頭の3層の堆積土に覆われた作土面の説明があり、次いで3層の小区画水田の湛水(水をためる)機能の違いが図表により説明がありました。最近では、小区画の理由を水田の湛水機能の脆弱性に求める考えが有力となっているとのことでした。「すき床」がなく畦も浅いことから水を溜める能力が低いことが小区画にならざるをえなかったのだと思いました。なお、その生産力ですが、両遺蹟の稲のプラントオパール(植体)の分析結果からは決して高くなく、最近の唐古・鍵遺蹟の第113次調査の中期後半から後期の分析結果も同様の傾向を示しているということで、弥生期の生産力の低さを感じました。問題は、大規模水田は、農業技術の改善によって可能とすると、その時期がいつになるかが大いに気になります。

4 大阪平野の事例

奈良県の初期水田址の事例は、大阪平野の初期水田と同様であるとして、改めて松原市池内遺蹟、平野区八尾南遺蹟、隣接する長原遺蹟さらには京都大学構内遺構(吉田二本松遺蹟・北白川追分町遺蹟)などがスライドで説明がありま

した。興味深かったのは、北白川追分町遺跡の関連で、前期の畠作遺構が水田址と一緒に検出されていることです。最近三重県松坂市筋違遺跡でも同様の遺構が検出されているとのことで、近畿では畠作遺構は古墳期に多く弥生時代では後期の瓜破遺跡にみられる程度と少ないと思われていましたから、大幅に遡ることとなります。朝鮮半島で多く検出される雑穀栽培(畠作遺構)との関連が注目されるとのことでした。

5 その他の事例

最後に、北部九州の初期水田址がどのようなであったかの説明がありました。国内最古の水田址で著名な菜畑遺跡を例とし、小丘陵の先端という地形に加え水路と直結した小区画という形

態は、まさに近畿の初期水田と同様でした。また、プラントオパール分析では雑穀栽培(畠作)の痕跡が残っているとのことでした。大規模水田経営の代表の登呂遺跡も、再調査で小区画水田であったことが判明した報告がありました。

6 まとめ

初期水田は、①扇状地端部や低丘陵先端部といった地形に位置し、②地形勾配に配慮した緩斜面を利用した小区画水田で、③小区画の理由が湛水との関連を有するといった普遍的特徴をもっていることが分かりました。また、④小規模の水田経営で、⑤水路と小区画水田が直結する灌漑の形態が共通であることも分かりました。

2 都市の視点

大阪市池上曾根遺跡の大型建物が検出された時に、同遺跡が「弥生都市」であるか否かが論じられました。そこでは、大型建物が「政治的・経済的・宗教的センター機能」を有する施設であるかが問題となりました。それは、都市の指標である「中枢的(センター)施設」に該当するか否かということです。それ以外に都市の指標としては、①集住(人口密度が高い)②商業と工業の発達(農耕に依存しない)③外部依存性(食料などを外部依存)をあげる例が一般的です。果たして、これらの要件に纏向遺跡が該当するかが問題となります。現地で、遺跡の遺構や出土遺物を確認したいと思います。そこでは、遺跡から検出された大型建物群、多様な搬入土器、農耕具の不在や鉄製品の評価そして出土した仮面木器や多量のモモの種に表れる祭祀性などさらには市場の存在などが話題となります。

3 国家形成の視点

考古学は、社会進化の諸段階の指標をもっておらず、多くはその指標を文化人類学に求めています。一般的には、採取生活のバンド社会→部族社会→首長制社会→国家(E・サービスなど)という政治組織の発展段階が提示されてい

第18回 弥生ウォークのご案内

-纏向遺跡と初期古墳-

井上 知章

1 はじめに

第18回の弥生ウォークは、桜井市纏向遺跡とその周辺の初期古墳群を訪れる予定です。ご承知のとおり、纏向遺跡は邪馬台国の候補地といわれています。遺跡は、3世紀のはじめに突然現れた計画的な都市と評価されていて、「纏向学研究」創刊号では、「ヤマト王権の最初期の政治的中枢(大王都)でないかとの主張が大方の賛意が得られるようになった」と記載されています。しかし、後述するように異なった意見も多数あります。今回は、弥生第V様式末の纏向1類(AD180年)から纏向5類(AD290年～)までの時間幅で遺跡をみたいと思います。それは、弥生時代から古墳時代に移行する期間に相当し、いわば古墳期の移行プロセスを、古墳からの視点でなく、できる限り弥生からの視線でみたいと考えています。今回訪れる遺跡は、奈良県でも周知の遺跡ですので詳細は現地ということで、その際の見方をご紹介します。

ます。「七・五・三」論争(都出比呂志)という言葉がありました。国家の成立時期を大宝律令(7年)に求める考えは文献史学によく、卑弥呼から始まる政治センター機能を重視する意見は、その時期を3世紀に求めています。しかし、古墳時代を部族連合とし弥生期を部族社会とする意見や、古墳前期を首長制とし古墳時代を初期国家(国家成立を5世紀に求める)とする意見、さらには弥生中期を部族社会、後期を首長制社会とする意見など様々あるのが現実です。

首長制は、世襲による頂点に立つ特定の人物を擁する階層化社会で、支配下におかれた人々の経済活動を統制し、農耕の発展による余剰生

産物や物品を再分配する権限を有し、それを維持するための強制力をもった政治組織です。その人口規模は、5000~20000人規模といわれ、その権威の源泉は、威信財や祭祀に求められています。また、水路の建設や宮殿などの建設工事に人々を動員する権限も持っています。

果たして、首長制が(初期)国家の成立前の弥生時代の後期に成立していたかが焦点となります。纏向遺跡では、弥生から古墳時代の移行の過程を、生産力の変化や社会組織、政治組織の変化さらには墓制等の変化など多方面から論議できればありがたいと思います。

日本酒の歴史について (1)

植田 洋高

1 はじめに

日本の酒の成り立ちをたどると、3世紀に書かれた『魏志』倭人伝の中に〈喪主哭泣シ、他人就ヒテ歌舞飲酒ス〉〈父子男女別無シ、人ノ性酒ヲ嗜ム〉といった酒に関係する記述を見つけることができます。ただしそれが米の酒なのか、液体かかゆ状のものか、はたまた果実から造られた酒なのかはわかっていません。

日本酒は、コメを原料として造られます。酒がコメを主体として造られるようになったのは、弥生期に水稻農耕が定着した後で、西日本の九州、近畿での酒造りがその起源と考えられます。しかし、それ以前は、どうだったのでしょうか。まずは、弥生時代以前の様子を確認します。

2 猿酒

猿酒は、サルが木や岩の窪みなどに果実などを溜め込んでそれが発酵して酒になったものといわれています。現在の果実酒に相当するもので、猟師や木こりなどが、飲んだともいわれています。この猿酒伝説は、江戸時代後期の戯作

者曲亭馬琴の「椿説弓張月」にも書かれています。しかし、サルでなくとも森や緑があふれていた時代では、完熟した果実を置いておくと、山で生まれた天然酵母が付着して糖分が発酵し簡単にサケができた可能性があります。現在、珍重されている「貴腐ワイン」がその例です。

3 縄文時代

冷涼な環境の旧石器時代では、「猿酒」の生成は困難だったと推測されます。温暖化が進行し、野山に緑が多くなった縄文時代にその可能性をみることができます。そこで、活用されたのが「土器」だと思います。貯蔵用のカメに果実を寝かせ、集落の周辺で繁殖した自然酵母の作用で、果実酒ができた可能性があります。縄文時代の出土した土器の底から山ブドウの種などもでています。そのサケは、アルコール度数は、少ないでしょうが、甘味で香りの良いサケだったでしょう。酒が米を主体として造られるようになったのは、水稻稲作が始まる弥生時代です。次回は、弥生時代のサケを紹介します。

編集委員

井上知章 植田洋高 大森初美 谷口敬子
花坂志郎 福島道昭 宮川真由美